高校生、海越え交流

アジアユース人材育成 14カ国55人

地球環境問題 沖縄で議論

期間中、パフォーマンスチームが作曲曲を手掛けて完成させた「ピコーズ・オブ・ユー」を閉会式で歌った＝21日、名護市

アジア各国と県内外の高校生が集まり、沖縄で環境問題を議論しながら交流を深める県の「アジアユース人材育成プログラム（AYDPO）」が5日から22日まで県内各地で開催された。参加者は生まれた国や文化・宗教の違いを背景とした意見の衝突、ホームシックなどに直面しながらも、エネルギー問題を中心に地球規模の環境問題を学んだ。台風15号の影響で1日前倒しとなった閉会式では成果発表を行ったあと、メンバー全員でつくり上げたオリジナルソング「ピコーズ・オブ・ユー（あなたがいたから）」を披露した。

前身となる国の「アジア青年の家」事業も含めると、ことしで8回目となる同プログラムには、東南アジア諸国を中心に日本を含め14カ国の高校生55人、生徒を学習・生活面からサポートする「チューター」と呼ばれるスタッフ12人が参加した。

糸満市や渡嘉敷村など県内4カ所の宿泊施設で体験学習やチームビルディングの方法などを学んだ。グループディスカッションでは参加者個々人の20年後の未来、「未来のビジネスプランを共有しよう」をテーマに話し合った。

ビジネスプランを発表し、高校生が中心となって運営するウエブサイト「高校生による架け橋コミュニティー」を設立するアイデアを提案した。

これまで600人の青年がプログラムに関わり25カ国以上をまたいだネットワークは、世界に開かれた交流・共生の島「OKINAWA」の実現を目指す。

㊤中間発表に向け、ビジネスプランを講師に相談する生徒＝1日の活動を終え、スタッフにハイタッチで送り出される参加者＝14日、渡嘉敷村

多様性認め 輝く生徒

人材育成プログラムの意義を語る開梨香さん＝21日、那覇市安謝

プログラムの意義を聞く

AYDPOプロデューサー 開（比嘉）梨香さん

14カ国55人の高校生を12人の大学生がサポートし、8人のファシリテーター（促進者）が導き25人の事務局が全体を運営するという重構造で人材を育成している。全員が主体性を持って取り組む過程を通じて各自が自分の可能性に気づき、私にもできるという自信が芽生えを目組みにしているのがこの事業の特徴だ。

高校生は、3週間寝食を共にしながら、多様な講師から環境問題やその解決のためのビジネス等を学び、グループごとのビジネスやプランを作る。人種・言語・宗教・社会環境・経済環境の異なる若者が本音で議論し、ぶつかりながら共に創り上げる世界はわれわれ大人を圧倒する。

期間中、彼らはホームシックに泣き、言語や価値観の違いなどたくさんの壁にぶつかる。それを乗り越えた時、お互いを認め合い、多様性を受け入れられるようになる。脱皮することで自信が湧き、輝き出す。

卒業生らの活動も目覚ましい。今年はたくさんのUP・OGが集い、年度を超えたネットワークがつながり始めた。彼らは沖縄・日本・アジアのリーダーとなるはずだ。沖縄を軸にアジアのビジネスネットワークが動きだす日が待ち遠しい。

関係者・講師から期待の声

実体験通し心一つに

黒川清さん

政策研究大学大学院教授

本事業は離島での民泊や生活体験などのフィールドワークが充実している。いくつものアジアの国からの参加者が一緒になってさまざまな議論を交わすが、そこから共通の目標を探し出す。その過程で気持ちがひとつになっていく。世界規模の水や環境問題について理解を深めるが最終的には「教育」「ともだち」「世界は一つ」などのキーワードにたどり着く。

読み書きでは得られない感動を体験し、ことばを超えて心が開かれ、成果をつくりだす。本来の教育の姿がそこにある。実体験の大事さ、教科書での教育だけではだめだ、と自分自身も知り、違うことの大切さを知る。講師が何を伝えるかも重要だが、アジア地域の15歳前後の若者が国籍を超え、3週間沖縄に滞在することに意味が大きい。

卒業生の多くが主体的にプログラムに参加している。彼らはこのプログラムを経ることから、価値観を変えるきっかけとなった者も多い。自分で考え行動し、選択肢を増やしていくことが大切だ。世界の行方は、若者の選択で変わると信じている。

フィールドワーク充実

世界の課題に挑んで

杉本誠司さん

ニワンゴ代表取締役社長

「社会的課題を解決していく人材、あるいはそれを考えられる人材になろう」というテーマを設定し、学生との議論に臨んだ。本プログラムは「学ぶ」ということより「考える」ことがメーンとなるカリキュラムだ。国の都合のある人の立場で議論せず、課題解決のための本質的なコミュニケーションを図り、現実的な提案を模索する。

エネルギー問題など、容易に答えが出ない課題に向かいアイデアを出すことは大人にとっても難しい。その壁を越えるため、豊富な講師陣から、考え方のポイントや視点をもらい、共有する。参加者は3週間という期間で大きく成長する。

アジアをはじめとするグローバルな展開の中で、AYDPOには既にコミュニケーションが形成されている。将来のリーダーとなり得る参加者には、国際交流や外交を通じて世界の課題に挑戦してほしい。そのきっかけがここにある。

人材育成は偶発的にはなしえない。それを戦略的に達成できている。本事業の価値の一つはそこにある。

包容力ある人材育つ

稲嶺恵一さん

りゅうせき参与（元沖縄県知事）

事業立ち上げに、内閣府の委員として携わった。沖縄は地理的・文化的・経済的に特異な位置にある。現在、ハブ流大学、科学技術大学院大学設立など国際化のスピードは増している。変化のスピードも増す。それに対応できる人材育成が必要だ。

将来、アジアの若きリーダーとなるべき人材が長期間沖縄に滞在し交流を深める。思い出だけではなく沖縄という土地の知識を自国に持ち帰る。この意義は大きい。一方で言語・文化・宗教の違いにより、彼らを受け入れる側の態勢づくりが「難儀」なことだ。しかし、それを乗り越えてこそ、知識は体験を超えられない。本プログラムに参加している若者は、ほかでは味わえない旅の体験と異文化交流を経験するだろう。他者を理解する「包容力」を備える人材が育つだろう。人材、文化交流の先には経済の活性化が見込まれる。本プログラムはどんな形であれ継続されるべき事業だと考えている。

OB・OGの声

リーダーのあり方を知る

知念佐枝さん（18）

北中城村出身（開邦高卒）・国際基督教大1年

AYDPOへ参加する以前は、学級委員などを通じてクラス全体を先導することを意識してきた。しかし「リーダーとはプラットフォーム存在」であるべきだとの場所で知ることができた。私自身の学びの方向性も変化した。「教育」の重要性を実感し、医学部専攻から国際開発や教育の分野に変更した。後輩には世界的視野に立ち、仲間とネットワークを広げやりたいことを実現させてほしいと思う。

フォトジャーナリスト夢

儀間渉さん（22）

中城村出身（普天間高卒）・琉球大4年

昨年、参加者を学習や生活面からサポートする「チューター」としてAYDPOに参加した。今年は写真や動画で何かを伝える修業とするため「記録班」の役割を担った。自分の学びだけではなく周りに対する気遣いを意識した。世界的視野に立つことの重要性を再確認できた。大学では政治や国際問題を学んでいてフォトジャーナリストを自指しているこの。活動のモチベーションとなっている。

国際開発分野の職に関心

大木佳奈さん（20）

豊見城市出身（沖縄尚学高卒）・国際基督教大1年

プログラムを終えて、アイベートコンテストへの出場やフランス留学などを経験した。就職先への関心も変化している。国連などの国際的な組織にとらわれず、国際開発の分野で活動したい。現在、フィリピンのフィールドワークの計画を進めている。「自分の行動範囲を決めることなく、フットワーク軽く、活動してほしい」と高校生にエールを送りたい。

思いを伝えることが大切

島田颯さん（18）

北海道出身・早稲田大1年

今年は青年リーダーとしてプログラムに参加した。参加者には英語にコンプレックスを持たず、下手な英語でも思いを伝える事が大切ということや、仲間に頼る大切さを学んでほしい。私が学んだことは「持続可能な開発」は教育に結びついていく、ということ。冬休みを利用し、フィリピンにも留学予定だ。後輩やAYDPOの仲間と共に沖縄の地に戻り、一緒にアジアを背負う人材となりたい。

持続可能な開発を実践へ

ニコル・ジェーン・B・オングさん（17）フィリピン出身

参加者のアジアに対する高い意識と環境問題への関心を知り感銘した。文化背景が違うので意見の衝突は起きたが、その度に相手を尊重するにはどうすればよいかを考えた。比国を代表して参加しているが、意見する時は世界的視野、外交的立場でアイデアを出した。「持続可能な開発」が私の学習テーマ。それはもはや概念ではなく生活の一部だ。プログラムの成果を大学でも生かしていきたい。

物おじせずに意見述べた

バブコック椎名さん（18）

沖縄市出身　コザ高

参加者はディスカッションの場で平等に意見の機会を求められた。相互理解が進まなかったら英語力にコンプレックスを持つ仲間がなかなか意見をしなかったり、さまざまな葛藤があった。私は物おじせずに主張するタイプなので、時にいらぢちを隠せずけんかすることもあったが衝突のあとにはさらに強い絆が生まれ、団結力につながった。環境問題含め、経験したことを身近な人に伝達したい。

自国で貴重な体験広める

ケネツ・オン・ジン・ロンさん（18）シンガポール出身

世界の環境問題の現状を学びソリューション（解決方法）を探すことが重要だ。ウェブ上で情報発信していくことも大切。さまざまな意見とアイデアに触れ、民主主義の手法で合意を得ていくことを経験した。プログラム参加当初に比べると自分でも成長が感じられる。地元では小学校に出向き、環境教育に携わる活動をしている。沖縄での貴重な体験、AYDPOの成果を自国で広めたい。

「気遣い」真の意味で実感

中道理仁さん（16）

栃木県出身　宇都宮高

普段はテストの成績や所属の学校などを意識し、本当の自分でいられない気がする。AYDPOの環境は性別や国の違いも関係なく、素のままの自分で過ごすことができた。素であるが故に意見の衝突もあった。グループの意思をどう機能させるかを意識した。その課程で真の意味での「気遣い」を実感した。カリキュラムを通じて、「人の問題を解決する人材」になりたいと確認できた。

参加者の声

閉会式を終え、参加者は開放感と達成感に包まれた＝21日、名護市・オキナワマリオットリゾート&スパ（AYDPO事務局提供）

活動終了後のスタッフミーティングは連日、深夜にまで及んだ＝14日、渡嘉敷村